

平成30年6月26日現在

機関番号：18001

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12895

研究課題名(和文)日本語学習者による発話キャラクタ獲得過程の解明

研究課題名(英文) the Formative Process of "Verbal Character" among Japanese Language Learners

研究代表者

山元 淑乃 (YAMAMOTO, Yoshino)

琉球大学・グローバル教育支援機構・講師

研究者番号：50468071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：第二言語学習者が目標言語でキャラクタ(キャラ)を獲得する過程と背景を、学習者のライフストーリーのSCATを用いた質的分析によって、探索的に解明した。キャラクタは、学習者本人にも認識されていない多様で複雑な心理的要因を背景とし、目標言語の大量インプットとアウトプットを通して獲得される。そこでは、幼少期からの両親との関係や社会(学校)での自己否定的な体験が、大きな要因となり得る。第二言語習得は、第一言語での望まない自己を変化させたり、自己に欠如している要素を填補したりする機会となり得、その習得にはしばしば自己の表象として「みられたい自分」になるためのキャラクタの変化が伴うと考えることが可能である。

研究成果の概要(英文)：We explored the process and the background of the second language learners' acquisition of the "character" (Kyara) in the target language by qualitative analysis of their life stories, utilizing SCAT (SCAT Steps for Coding and Theorization). The characters are acquired through massive input and output of the target language with diverse and complicated psychological factors as background, unnoticed by the learner himself. Relationships with parents from early childhood or self-denying experiences in society (school) can be major factors. It is plausible to think that second language acquisition can present an opportunity to change some unwanted aspect of self as represented in the first language or to complement the elements perceived as lacking in the self, while second language acquisition often involves changes in characters in order to be "perceived as desirable".

研究分野：第二言語習得

キーワード：キャラクタ キャラ 質的研究 SCAT

1. 研究開始当初の背景

近年の第二言語習得研究において、社会的構成主義の影響を受け、「アイデンティティ」という概念をキーワードに、個々の学習者とそれを取り巻く社会に目が向けられ、様々な質的方法を用いた研究が進んでいる。これに対して、本研究は、第二言語学習者が示す「自己」を、あえて「アイデンティティ」ではなく、「キャラクタ」を通して、捉えようとするものである。

キャラクタとは、現代の若者を中心に、一般的に「キャラ」と呼ばれているもので、定延(2011)によって「キャラクタ」と定義され、その特徴が詳細に示されて以来、言語学の分野では、キャラクタが表現される言葉や身振りなどについて、研究が進んでいる。キャラクタは、たとえば、女性らしい/男性らしいといった性別、子どもっぽい/老人といった年齢、シャイ/真面目/優しいといった性格、教師っぽい/ヤクザ風といった職業など、「あの人は 人」と他者から、または「自分は〇〇な人」と自分で、直感的に認識する人物像である。キャラクタは、話し方や身振りといった行動全般、姿勢、身体、服装、文字、文章、アート、日用雑貨、消耗品など、ありとあらゆる方法で表現され、実際は状況に応じて変わっているが、社会的には「変わらないこと」が期待されている。

アイデンティティが「心理」であるのに対して、キャラクタは「表象」であり、自己の心理を問わない、心理を捨象したところに意義がある。その点で筆者は、キャラクタがアイデンティティよりも「言葉」に親和性があり、言葉の学習の実態を検討するのに相応しい概念であると考え。さらに第二言語で表されるキャラクタを検討することで、学習の動機づけと学習リソースと学習方略、つまり何のために何をを用いてどのような方法でその言語を学習するのかという、いわばその人の第二言語習得のすべてを捉えられる可能性がある。そして、その表象を獲得するに至った学習者の心理を探索的に解明することで、かえって、これまでのアイデンティティを概念的枠組みとした第二言語習得研究ではみることのできなかった、学習者の心の奥深くに存在するような学習とその動機の実態が明らかになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、「キャラクタ」を概念的枠組みとし、第二言語学習者が目標言語で示す、母語と異なる(または同様の)キャラクタが

- (1) どのような過程を経て獲得されたのか
- (2) その獲得の背景にはどのような要因があるのか
- (3) かれら自身や周囲によってどのように認識されているのか

を探索的に解明することを目的としている。

さらに、流暢な第二言語で学習者が表すキャラクタは「みられたい自分」であり、その表象を持つに至った動機は、かれらの育った社会において、実は、第一言語での「みられたくない自己」または「みたくない自己」であった可能性がある。第二言語学習者が、第一言語ではなれなかった自分になる手段として、または第一言語では得ることのできなかった、自己に欠けている要素を得る手段として、第二言語を習得し、時にそのキャラクタを変え得ると考え、その可能性を探ることも、本研究の目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、(社会的)構成主義のパラダイムに立つ。

研究参加者は、英語、フランス語、ルーマニア語、日本語のいずれかを第一言語とし、英語または日本語を第二言語として習得し、その言語で何らかのキャラクタが表現出来るほどそれを流暢に話す第二言語学習者とする。

研究参加者に対する半構造化インタビューによって得られた音声データを逐語記録化したテキストをデータとし、SCAT(Steps for Coding and Theorization)(大谷, 2008, 2011)を用いて、かれらの幼少期からのライフストーリーを構築し、特にその心理・社会的(psychosocial)な側面に焦点化して、質的に分析する。

4. 研究成果

第二言語学習者によるキャラクタ獲得過程とその背景について、以下のことが明らかになった。

- (1) 第二言語学習者によるキャラクタ獲得は、目標言語の多量のインプットとアウトプットを通して実現され、その過程では重要な他者がしばしば大きな役割を果たす。
- (2) 第二言語学習者によるキャラクタ獲得には、学習者本人にも認識されていない、多様で複雑な背景がある。そこでは、幼少期からの両親との関係や社会(学校)での人間関係に関する自己否定的な体験に起因する、アイデンティティの未形成が要因となっていることがある。
- (3) 第二言語学習者で獲得されたキャラクタに対する認識には、無意識的なものから、非常に意識的なものまで、異なる度合いがみられる。そして、それが認識されていない場合には、そのことが第二言語でのネットワーク形成において問題の原因となる可能性がある。

また、第二言語学習者にとって、その認識の度合いにかかわらず、その言語の話者から「みられたい自分」が、キャラクタとして表象されていると考えられる。第二言語学習の様々な動機の背景には、異なる言語で「みら

りたい自分」になる、つまり第二言語でのキャラクタ獲得という、より根源的な学習動機が存在する。そして、目標言語の大量インプットとアウトプットは、「キャラクタ獲得」という動機にもとづいて行われる第二言語学習の学習リソースと学習方略となり得る。つまり、第二言語で表されるキャラクタには、第二言語学習の動機づけと学習リソースと学習方略、いわば学習者の第二言語習得のすべてが表象されているといえる。

さらに、第二言語学習者は、第一言語が話される場で「みられたくない自分」や「そうあるべきではない自分」であることを感じており、その状況を打破するため、第二言語を選択することがある。それは、かれらが第一言語での自分に否定的な要素を感じ、それを変えることを望んでおり、新しいキャラクタを獲得する手段として、第二言語を選ぶためである。つまり、第二言語習得は、「みられたくない自分」になるために、第一言語での望まない自己を変化させたり、自己に欠如している要素を填補したりする機会となり得、その習得にはしばしば自己の表象としてのキャラクタの変化が伴うのだと考えることが可能である。

引用文献

大谷尚(2008)4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案:着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2), 27-44

大谷尚(2011)SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法『感性工学』10(3), 155-160

定延利之(2011)『日本語社会のぞきキャラくり:顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

山元淑乃(2018)発話キャラクタは異なる言語間で変わりえるか:日本人英語学習者Aに関するフォーカスグループの質的分析から『琉球大学国際教育センター紀要』2, 18-38(査読無し)

山元淑乃(2017)アニメ視聴を契機とした日本語習得を通じた発話キャラクタの獲得過程に関する事例研究:フランス移民二世Cの語りの質的分析から『言語文化教育研究』(言語文化教育研究会)15, 129-152(査読有り)

山元淑乃・ムートンジスラン(2016)日本語母語話者が語る「面白い話」は字幕翻訳で伝わるか—フランスの日本語学習者を対象とした質問紙調査の分析結果から—『通訳翻訳研究への招待』(日本通訳翻訳学会)16,

84-95(査読有り)

〔学会発表〕(計2件)

Ghislain Mouton・山元淑乃「字幕は日本人の『ちょっと面白い話』の理解に役立つか:フランスにおけるアンケート調査とインタビューの分析結果から」日本語プロフィシエンシー研究会 研究集会:プロフィシエンシーと語りの面白さ(2015年10月4日 於・西宮市市民交流センター)

山元淑乃・Ghislain Mouton「日本人の『ちょっと面白い話』は日本語学習者に伝わるか—フランスにおけるアンケート調査の分析結果から—」第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(2015年8月28日 ボルドーモンテニユ大学(フランス))

〔図書〕(計1件)

山元淑乃(2018)「わたしのちょっと面白い話」を外国語に訳すフランス語訳をめぐる「後思案」(定延利之 編)『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』ひつじ書房

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

「第二言語習得に伴うキャラクタの獲得過程とその背景-3人のライフストーリーのSCATによる分析-」名古屋大学教育発達科学研究科 博士論文(審査中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山元 淑乃(YAMAMOTO, Yoshino)
琉球大学・国際教育センター・講師
研究者番号:50468071

(2)研究分担者

(3)連携研究者

大谷 尚 (OTANI, Takashi)
名古屋大学教育発達科学研究科・教授
研究者番号：50128162

定延 利之 (SADANOBU, Toshiyuki)
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：50235305

(4)研究協力者

ムートン ジスラン (MOUTON, Ghislain)
沖縄国際大学・非常勤講師

竹本 敏夫 (TAKEMOTO, Toshio)
フランス国立リール第三大学